

異文化理解と表現

—留学生との合同授業の試み—

大 藪 加 奈

本稿は、2000年度より筆者が行っている金沢大学の教養的英語科目と留学生の短期プログラムの合同授業「ディスカッションクラス：文化比較」について、実践報告し、問題点を述べるものである。

1.1 授業の位置付け

金沢大学には英語A、英語B、英語Cという三種類の教養的英語科目がある¹⁾。英語Aは、英語の未習者が対象で、主に留学生が受講している。英語Bはいわゆる教養の英語科目で、これは必修科目ではないが学生は一年生の前期、後期2つずつ、計4つの授業を履修しているのが一般的である。英語Cは、Bよりもレベルが高く（あるいは進度が早く）教官の専門分野に近い内容の授業も行われることとなっている。英語Cの単位は、英語AB1単位に対して、2単位であるが、言語科目の必修単位には数えられないので、受講しているのは特に英語に関心を持っている学生である²⁾。本稿で扱う「ディスカッションクラス：文化比較」は、英語Cに属する授業である。よって、日本人学生はこの授業を教養的言語科目（英語）として受講している。

金沢大学の短期プログラム（Kanazawa University Student Exchange Program）は、金沢大学と交流協定を締結している大学等から留学生を受け入れ、語学教育（日本語）、英語による日本事情・日本文化に関する授業及び各専門分野の授業を提供している特別な教育プログラムである。受け入れ期間は原則として1年間（10月始まり）である。「Discussion Class : Comparing Culture」は短期

プログラムの選択必修科目である。

1.2 授業の目的

この授業では、留学生と日本人学生の合同授業を行うことによって、受講者に同世代の学生との異文化間コミュニケーションの機会を提供する。日本人学生には英語のネイティブ、ニア・ネイティブスピーカーとの英語によるコミュニケーション方法を、留学生には英語を媒介とした日本人とのコミュニケーション方法を経験によって習得させるとともに、互いの表現方法の特徴を理解し、グループとしてのコミュニケーション方法も取得させることを目指している。

1.3 開講時期

この授業は2000年度前期を除き例年後期に開講している。

これは、留学生の短期プログラムが10月始まりであることを考慮している。留学したものの、なかなか現地の学生と交流する機会がない、ということは筆者も留学当初感じたことであり、短期プログラムを運営している留学生課及び留学生センターからの要望もあってこの時期を選んだ。

1.4 授業の形態

2001年度より、短期プログラムの学年暦は教養的科目の学年暦よりも開始時期が2週間遅れることになり、また大学祭前後の休業日、冬季休暇、学期終了時期にも差があるので、週によって日本人学生のための授業も行い、試験週間にも合同授業を続けている。学期の終了時期は約1ヶ月ずれるので、制度上は合同授業を続けることは難しい。しかし今までのところ、学年暦上は休業日のクラスにも学生が自主的に出席して合同授業が可能となっている。

週	参加学生	授業の内容
1	日本人	使用言語：日本語 ガイダンス 合同授業の説明，受講の動機の確認，英語の自習方法についてのアドバイスなど
2	日本人	使用言語：英語 自己紹介，積極性を促すためのゲーム，3回分のトピックス選択
3	日本人留学生	使用言語：英語（第一回合同授業） 簡単な自己紹介 全ての受講生と1対1の会話（3分～5分程度でパートナー交代） 全体で一言ずつコメント
4-7	日本人留学生	使用言語：英語（一部日本語） プレゼンテーション（留学生と日本人学生のペア活動） 質疑応答 コメントなど ペアまたは小グループでの活動（話題・論点を絞り，15分程度）をパートナーを変え3回 全体でのフィードバックまたは日本語での会話（5分程度） 第6週は年によって一部留学生と日本人学生のレビューセッション，日本人学生のためのレビュー・セッション，または休講
8	日本人留学生	使用言語：英語 レビュー・セッション 授業のしかたに対するコメント 毎週提出するレポートのフィードバック トピックス選び（ペアワークの後全体でのディスカッション，投票） 発表者の決定
9-11	日本人留学生	4-7週に同じ（日本語での会話時間は10分に延長）
12	日本人	使用言語：日本語 日本人学生のレビュー・セッション
13-17	日本人留学生	4-7週に同じ（日本語会話の時間10～15分）
18	日本人留学生	使用言語：英語・日本語 まとめのレビュー・セッション

1.5 これまで扱ったテーマ

話し合うトピックのテーマは学生たちが選んでいる。以下によく扱われるテーマを幾つか紹介する。

〔文化比較的なもの〕

教育制度、宗教及び祈りや祭りの形態、食べ物（名物、狂牛病対策、マクドナルト化現象など）、若者ファッション、時間の使い方、音楽

〔政治・政策的なもの〕

テロ対策、マイノリティー問題（各国の移民、在日韓国・朝鮮人、アイヌ、部落民を含む）、環境（地球温暖化等）、捕鯨、原子力、核拡散

〔日本についてのもの〕

マンガ、おたく、制服、英語教育、キャンパスライフ、金沢事情

1.6 受講生の内訳

〔日本人学生〕

英語Cは、一年生の後期から卒業するまで履修することができるが、実際に受講しているのは全学部生の約5%である。現在教養的科目のシラバスが上級生に配布されていないこともあってⁱⁱⁱ、英語Cを履修するのはかなり英語に興味を持っているごく少数の学生で、彼らは複数の英語Cを取っていることもある。授業態度は全般的に良く、本授業でも積極的に授業に貢献する熱心な学生が多い。これまでの日本人履修登録者の内訳は以下のとおりである。

開講時期	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
12年度後期	2(法)	1(保健)	0	2(教育)	5
13年度前期	0	6(文,法2,経済,薬2)	0	2(文,経済)	8

13年度後期	5 (法 4, 保健)	1 (文)	0	3 (文, 法, 経済)	9
14年度後期	0	0	2 (教育, 薬)	2 (法, 経済)	4
合計	7 (法 6 保健)	8 (文 2, 法 2, 経済, 薬 2, 保健)	2 (教 1, 薬 1)	8 (文 2, 法 1, 経済 3, 教育 2)	27 (文 7, 法 9, 経済 4, 薬 3, 教 3, 保健)

法学部の受講生が多いのは、言語Cを4単位取得するよう積極的に履修指導していることが大きいと思われる。(他に「履修案内」で英語Cの取得を勧めているのは薬学部) 必修でない言語科目を学生が取るには、学部の指導が影響力を持っていると思われる。

[留学生]

外国人留学生は、日本語能力には個人差があるようだが、英語の運用能力を証明することが出願の条件となっているので、英語のコミュニケーションに不自由な学生はいない。履修登録者数と国籍は以下のとおりである。

開講時期	国・人数	合計
12年度後期	2 (韓国, アメリカ合衆国)	2
13年度前期	0	0
13年度後期	4 (ドイツ 2, スロバキア, フィンランド)	4
14年度後期	6 (ドイツ 2, アイルランド, フランス, オーストラリア, アメリカ合衆国)	6
合計	12 (ドイツ 4, アメリカ合衆国 2, 韓国, スロバキア, フィンランド, アイルランド, フランス, オーストラリア)	12

2002年度より選択必修科目となったので受講生がやや増えた。

[非登録学生]

実は、この授業では、履修登録していない学生が毎年参加している。単位を必要としないがこの授業が提供する機会を利用したい学生で、留学生、日本人学生とも年によって数名いる。これらはいずれも金沢大学の学生で、授業には

出席するが、小論文・プレゼンテーションなどの課題は義務付けられていない。自分の授業が休講の時だけ参加する学生もいて、これらの学生の存在がこの授業にややサロンの性格を与えているといえる。

1.7 成績評価

成績は授業参加度と毎週提出の英語小論文（前半300語、後半500語）によってつけている。比率は、65%授業貢献度、35%小論文。授業に出席した学生は積極的に参加することを余儀なくされるので、出席していたのに単位が出ないということはない。英語小論文では、授業で扱った話題のうちの一点について、自分なりに考えを発展させて述べることを要求している。小論文はレビューセッションでコメントしたあと添削して返している。

2. 問題点

合同クラスという試みは、試行錯誤の連続であるが、問題点は多々ある。以下にその主なものを述べる。

2.1 留学生と日本人学生の英語力の差

この授業を受講している留学生は英語のネイティブ、またはニヤ・ネイティブ話者である。もともと英語がよくできる上に、留学生は英語が共通語の留学生会館にかたまって住んでいるので、英語を母語としない学生でもどんどん英語が上達する。実際、英語を母語としない留学生に「日本語は上達しましたか。」と聞くと、「はい。でも英語はもっと上達しました。」という返事が例年帰ってくる。

それに比べて、日本人学生は、留学経験者や帰国子女でも英語を使う機会は限られており、一般学生に至っては、オーラル・コミュニケーションの授業を

ほとんど受けたことがない学生もいる。すこしでも留学生との英語力の差を狭めるように、授業以外の自習や留学生と交流を勧めてはいるが、よほどの努力をしてもノン・ネイティブ留学生の英語上達度に対抗できず、相対的に自分の英語がどんどん下手になっていくような自覚を覚えるようである。実際には英語力が向上しているにもかかわらず、授業を受けることで意気消沈する学生が多いことが非常に問題である。対策については「学生の心のケア」で述べる。

2.2 学生の期待、興味の違い

留学生は英語教師ではない。国籍を問わず英語に堪能だが、筆者は彼らをTAとして授業をしているのではない。もちろん彼らの語学力を利用して日本人学生の英語表現の向上も図っているのだが、異文化間でのコミュニケーション能力を高めることを主な目的として、日本人学生も留学生も対等な立場で授業に参加しているのである。ところが、この授業は別々のシラバスを持つ二つの科目が一つの教室で行われている構造になっているので、日本人学生が授業に期待することと留学生が期待することが必ずしも一致していない。

日本人学生にとって、この授業は英語の授業である。そこで、ガイダンスでの説明に関わらず、留学生に対して語学教師的な性格を期待する学生が例年いる。レビューセッションでの発言によると、留学生がゆっくり、はっきりと話してくれない、自分が話しに参加できずに困っていてもあまりケアしてくれない、ということをも不満に感じることもあるようである。ガイダンスや授業の合い間に「普通の」ネイティブ話者の英語と英語教師の英語はかなり違うものであることを説明し、わからない時には何回も「ゆっくり話して」「もう一度繰り返して」と頼むように指導しているが、何回頼んでもすぐ早くなってしまうのは思いやりがない、と感じるようである。(このような感想は日本人のみのフィードバックセッションの時に述べられる。)

一方、留学生は、日本事情の授業として出席している。意見交換や交流を目的としている授業に出ておきながら、彼らの目から見て積極的に貢献していない学生に対しては驚きを感じるようである。また、多くの留学生は自分とかな

り英語力に差がある学生の英語を聞くという経験があまりない。特に英語が母語の学生の場合、学期初めの日本に着いたばかりの段階では、英語を外国語として見ていないので、教科書的な発音をしないと日本人に通じないということに認識していない。つまり、ネイティブ話者の「自然な」発音は、ノン・ネイティブ話者の「学習された」発音よりも日本人学生には聞き取りにくい、という現象がおこる。発音に注意し、ゆっくり明確に話すということの必要性を留学生に理解してもらうのは、ガイダンスや授業中に依頼するだけでは不十分であると思われるので、日本語で会話することで、立場を逆転させ、お互いの表現のしかたを反省する時間を設けている。

日本人学生と留学生ではディスカッションの形態に対する好みも異なる。日本人学生は1対1、または小グループで話すことを好み、留学生は全体でいろいろな意見を聞きながら話し合うことを好むのでこの2つの活動の時間配分には気を配る必要がある。

2.3 受講生数

合同クラスであるので、日本人学生と留学生の受講生の数や比率が問題となる。留学生はディスカッションに慣れていること、英語能力が一般に日本人学生より高いことを考えると、日本人が1.5—2倍程度でバランスがよいと思われるが、2002年度に短期プログラムの選択必修となるまでは、留学生が全く受講しなかった年もあり、仕方なく「看板に偽りあり」と断った上で日本人だけで開講した。2002年度は逆に日本人学生が少なく、一人の日本人に対して2人の留学生でディスカッションする状況が生まれている。これは日本人の学生にとって、かなり恵まれた環境ではないかと筆者は考えるが、学生に聞くと、留学生同士がどんどん早いスピードで話を進めてしまい、全く話せなくなってしまいうらしく、あまり喜ばれていない。日本人にとっては会話のスピードをコントロールでき、他の日本人の目を意識しなくてすむ1対1での会話が理想の形のようなのである。

2.4 体験型授業か、教授型授業か？

この授業では、学生に実際の交流経験からコミュニケーションの方法を学習させているので、授業で表現方法や文法について教官が述べるのは、それぞれのグループを回って学生が困っている時、学生に尋ねられた時だけである。日本人学生の中には、もう少し授業で教官が表現方法などを教授してほしい、という意見を述べる者もいる。留学生の中にもプレゼンテーションやディスカッションが苦手な学生もいるので、教授型授業で教える、という方法も考えられるが、この授業では教官は実際のディスカッション中に質問やコメントをする、希望者にプレゼンテーションの原稿を添削する、という方法で体験型の授業を行っている。

2.5 学生の心のケア

1対1の会話はできてもクラス全体のディスカッションで発言できる日本人学生は限られており、ほとんど無言のまま全体ディスカッションを終える学生もいる。ところが、このような学生は必ずしもディスカッションに参加していないわけではなく、必死に話の流れについてきて、何とか自分の意見を述べようと努力している間に、話が先へ進んでしまったり、他の人が同じような意見を述べたりして、結局発言しないまま、また一生懸命話を追って聞かざるを得ないことになっている場合もある。授業中このような経験をした学生は、授業後に胸の中に欲求不満感がつのって落ち込み、それが毎週続くと、だんだん鬱々とした気分になってくる事が、レビューセッションや日本人だけの授業での発言によって明らかになってきた。授業後に小論文を書かせているのは、このような欲求不満の解消のためでもあるのだが、小論文と3週間に一度のレビュー・セッションだけでは鬱々とした気分はなかなか晴れないようである。

対策として、そのような欲求不足や精神的な落ち込みは誰もが経験するものであること、欲求不満を感じることも語学習得上のひとつの過程であるので自己嫌悪におちいる必要がないことを説明し、添削した小論文に励ましの言葉を

添えたり、授業後に言葉をかけたり、何でも相談するようにメールアドレスを教えたりしている。しかし、精神的にタフでない学生は放棄してしまう。一方留学生は、日本人学生が放棄してしまうことに敏感に反応する。「なぜやめてしまったのか」「私たちは嫌われているのだろうか」「やめた学生は大丈夫なのだろうか」等々とレポートの端に書いてくる学生もいる。精神面で一番効果を上げていると思われるのは、今年から導入した「日本語の時間」である。授業の最後に留学生と日本人学生の立場を逆転させると、両者のボディランゲージまで変わる。日本人は劣等感を払拭でき、留学生は気がねせずに自分の日本語を練習できる、という理由で好評だった。

2.6 国際派学生御用達の授業でよいか？

この授業では、金沢大学にいながら留学した時のようなコミュニケーション環境を学生に提供しようとしているが、授業についてくる学生を見ると、積極性があり、精神的に強い、海外滞在経験者や旅行経験者がほとんどである。教養的科目でありながら、ごく一部の「国際派」学生御用達の授業となっているのが現状だ。英語Cを受講しようとして登録した学生の熱意を無駄にしたいくないと思いながら、小人数の授業にもかかわらず毎年1人程度脱落者が出ていることは問題であると思う。

3. 終わりにかえて

この授業を担当して最も強く印象付けられるのは、「英語会話ができることとディスカッションができることは比例しない」ということである。英語がネイティブやニヤ・ネイティブの話者であっても、話の流れと無関係のことを突然述べたり、個人的な偏見を自明の事実のように語る、クラス・ディスカッションに慣れていない学生もいる。一方で、たどたどしい英語でも説得力のある意見や、話題を発展させるような視点を提供できる学生がいる。この授業には、

例年留学経験者や帰国子女がいるが、日常会話に長けている彼らが、必ずしも優れたディスカッション能力や、お互いの考えを発展させていけるようなコミュニケーション能力を備えている訳でもない。このような状況を何度も目の当たりして、学生が自分の意見を英語で述べ、違う文化の人たちとディスカッションを行うためには、表現方法のパターンを教えるだけでは無理だと筆者は感じている。必要なのは、話者の意見や話の流れを的確に掴めるリスニング力、理解力；色々なトピックをおもしろく感じる知的関心や好奇心；自分の考えを短時間でまとめられる能力と独創性；自分の意見を物怖じせずに発表できる自信；意見交換しながら考えを展開してゆける発展的な才能などの総合力である。英語の授業だけでこのような総合力が育めるはずはない。すべての英語ネイティブ話者が、そのような能力を持っている訳でもないのであるから。

自分が興味を持っている事柄について、自分の考えを伝えたいという強い気持ちがあれば、表現のもどかしさを押して、学生は口を開く努力をする。なんとか伝えようとする意思がある時、流暢でなくてもその言葉は他の人間に「聞こう」という気持ちをおこさせるので、聞き手となった留学生たちは根気よく待ちながら聞いている。「言いたいのはこういうことなの？ああいうことなの？」と表現の手助けをしながら聞いている学生もいる。そうやって助けられたり、試行錯誤して発した言葉でコミュニケーションが成立した時、私たちはその表現を体得していくのではないだろうか。この授業では、このコミュニケーションの成立経験、自分の意見が伝わり、それに対して相手が答えてくれた、という成就感を味わう機会を与えること、そしてコミュニケーションが持ちたくて欲求不満になるといった経験を味わう機会を与えていると思うが、努力の根本にある「伝えたい」という感情を掘り起こすことはあまりされていない。学生たちは15週間一緒にいることで、自分たちにとって心地よいコミュニケーション方法は身につけてゆき、グループとしてなごやかな雰囲気にはなるのだが、今後は、もうすこしコミュニケーションの根本にある「伝えたい」、「聞いてみたい」、「話し合ってみよう」という気持ちを掘り起こす努力もしてみたいと思う。

- i 2002年現在，教養的科目のカリキュラム見直しが行われており，2004年から2006年頃までに新しいカリキュラムが導入される予定である。
- ii 平成14年度は前期310名、後期190名の学生が英語 C を受講した。(平成14年度の金沢大学学部生数は10,732人)
- iii 2003年度より Web 上で見る事が可能になる予定。このことにより，より多くの上級生が英語 C の情報を得て，履修登録することが望まれる。